

身体を通じた日本文化の翻訳と受容に関する研究

——グルジア、トビリシにおける相撲の受容・指導の状況から

井上 宗一郎

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 後期課程 3年

調査期間

2007年2月16日～3月10日

調査地

グルジア、トビリシ市およびその周辺市域

調査方法

現地調査はインタビュー調査と観察によっておこなわれた。インタビュー調査の際には、グルジアトビリシ市内にある、Tbilisi Institute of Asia and Africaの日本語学科在籍の大学院生および大学生（計2名）の逐次通訳によっておこなわれた。両氏とも日本の相撲についての基礎的な知識を有しているため、通訳者として適切であると判断した。

なお、現地アマチュア相撲組織の練習開始予定が当初のものに変更になり、滞在期間中に練習がおこなわれなかった。そのため当初計画していた練習風景のビデオ撮影と練習中の人々のやり取りの記録については、今回の調査では実施することができなかった。従って、本調査はインタビュー調査と観察が中心となった。

今回の現地調査は、インタビュー調査を用いて以下2点に注視して実施された。

- ①グルジア相撲連盟 (Georgian Sumo Federation) の組織・活動概要
- ②日本の相撲組織 (プロ・アマ) との関係

本調査の目的

本プロジェクトは、以下の2点の長期的研究目的に基づいている。一つ目の長期的研究目的は、グルジアにおけるアマチュア相撲の受容・指導の現状の詳細な報告に基づく、身体を通じた日本文化の接触・変容の動態的記述である。そのためには、接触・受容の受け皿となる、グルジアの地域特性の把握が不可欠となる。したがって二つ目の長期的研究目的は、グルジ

ア、特に首都トビリシの生活実践や経済動態を視野に入れた、民族誌的アプローチによる地域研究である。

今回の調査は、上記の長期的研究目的のための基礎調査に位置付けられる。しかしながら、先述したように練習が実施されなかったため、「身体を通じた」という課題に言及することが困難である。本報告では、グルジアにおける日本の相撲の現状という課題を設定して、グルジア相撲連盟の組織概要と活動について以下に報告を実施する。

調査地概要¹⁾

国名：グルジア〔国名現地語表記：Sak'alt'velo、英語表記：Georgia〕

人口：469万人（2004年推計）

面積：6万9700km²

首都：トビリシ〔Tbilisi〕（人口：110万人）

言語：グルジア語（国家語）、アブハジア共和国においてはアブハズ語が国家語に相当



民族構成：グルジア人 83.8%（スワン人、メグレル人、アチャラ人などを含む）、アルメニア人 5.7%、ロシア人 1.5%、アゼルバイジャン人：6.5%、その他（オセッタン人、アプハズ人など）2.5%（2002年現在）

宗教：グルジア正教、イスラム教、アルメニア教会、ロシア正教、ユダヤ教など

通貨：ラリ（Lari）

1人当たり GDP：2,500\$（2004年推計）

失業率：17%（2001年推計）

主要輸出品目：金属くず、機械、化学製品、石油再輸出、柑橘系果物、ワイン

主要輸出相手国：ロシア 17.7%、トルコ 17.3%、トルクメニスタン 12.2%（2003年時）

主要輸入品目：燃料、機械・機械部品、輸送設備、穀物・食料、医薬品

主要輸入相手国：ロシア 14%、イギリス 12.9%、トルコ 9.9%（2003年時）

日本からの輸出額および主要品目：15.1億円（電気製品、輸送用機器）

日本への輸入：3.1億円（化学製品、機械機器）

調査報告

グルジア相撲連盟（Georgian Sumo Federation）の組織・活動概要

○所在地：グルジア、トビリシ市ヴァケ地区、Sports Department of Georgia 内

○会長：Mr. Tengiz Rukhadze

○組織沿革

グルジア相撲連盟（Georgian Sumo Federation）は、1998年8月に組織された。当時、現連盟長の Tengiz Rukhadze 氏と現連盟幹部の Zurah Rekhnashvili 氏がスペインでおこなわれていた柔道のヨーロッパ大会に、コーチとして参加していた。その大会で、現ヨーロッパ相撲連盟（European Sumo Union）会長の Gutnter Romenath 氏から誘われたことをきっかけに、グルジア相撲連盟が設立されることとなった。現在グルジア相撲連盟は、トビリシ市内ヴァケ地区にある、Ministry of Culture, Protection of Monuments and Sport, Department of Sport and Youth Affairs 内にある。設立時、Rukhadze 氏を含む5名の幹部がおり、そのうち Rukhadze 氏を含む4名が柔道関係者であった。現在は会長を含む3人の役員と2人のコーチ、および事務員2名によって運営されている。

○運営資金

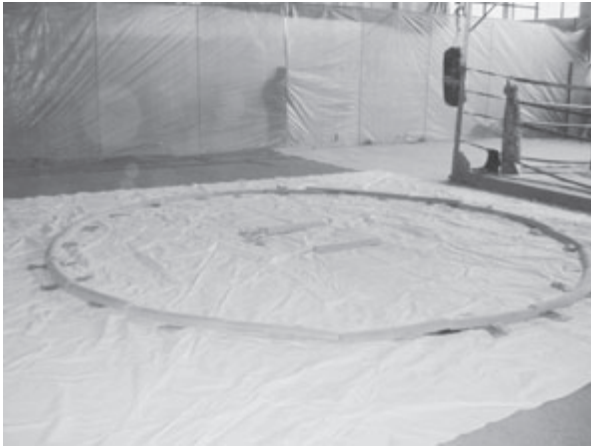
連盟設立当初は Rukhadze 氏自身が経営する会社による支援によって成り立っていた。ヨーロッパ大会などで好成績を残したことで、Ministry of Culture, Protection of Monuments and Sport に加盟することになり、国からの援助がもらえるようになった。会長の Rukhadze 氏は“RBR”という住宅建築会社を営むと同時に、スポーツ協会の組織の一部として、スポーツの練習場などの建築をおこなう、国営会社“Sak-Sports-Msheni”という会社を営んでいる。連盟の年間の総支出は遠征に行く国や地域によって変化するが、概ね年間50,000Lr から30,000Lr²⁾、USドルに換算すると85,000ドルから50,000ドルとなる。現在運営資金は、75%を国からの援助で、25%を Rukhadze 氏の経営する会社からの援助によって賄われている。さらにその内訳として、国からの援助は、海外へのコーチや選手の遠征費が充てられ、Rukhadze 氏の経営する“Sak-Sports-Msheni”からの援助がコーチのサラリーに、“RBR”からの援助が遠征費に充てられている。

しかしながら、施設の項でも触れるがグルジア相撲連盟は土の土俵を所有していない。連盟の幹部達は、土の土俵の設置、および相撲の常設練習施設の建築を目指している。そのため彼らはアゼルバイジャンにある日本大使館、グルジア日本文化センター、日本相撲連盟、日本相撲協会に資金援助の要請を数回にわたっておこなっているが、現在のところ援助がなされる予定はないとのことであった。

○施設

設立翌年の1999年には、日本相撲連盟からビニール製の土俵とまわし、そして試合のビデオや指導のマニュアルなどが贈られた。現在もそのビニール製の土俵で練習している。練習場は、建物内の室内練習場にある。普段は折り畳んであり、練習の時だけ上げて使う。シートの下にはフェルト生地の布が敷かれ、その下はコンクリートとなっている。室内練習場は半分がトレーニング・ジムとなっており、ブルーシートで間仕切りがされた一方にボクシングのリングとビニール製の土俵を敷くスペースがある。かつては土の土俵を所有していたようだが、現在はこのビニール製の土俵のみである。

一方で、後にも触れるが、グルジアでは柔道の人気非常に高く競技人口も多い。練習施設も充実しており、また国からの資金援助や日本からの資金援助もある。滞在中にはグルジア日本文化センターにおいて、グルジア柔道連盟に80,000ドルの補助金が授与された。



室内練習場の様子



ゴリ市の柔道場での練習風景

○活動概要

ヨーロッパでおこなわれる、年間の大会スケジュールはヨーロッパ相撲連盟のホームページを参照にすると³⁾、2005年の場合、EUROPEAN CHAMPIONSHIPS, JUNIOR WORLD CHAMPIONSHIPS, WORLD GAMES, SENIOR WORLD CHAMPIONSHIPS の計4回の大会が6月から10月にかけておこなわれている。グルジア相撲連盟幹部も、2007年は4回の大会に参加する予定であると語っていた。通常の練習は恒常的に実施されるわけではなく、大会の1ヶ月ほど前から練習を開始するとのことであった。国内大会がおこなわれた年度を正確に聞き取ることが出来なかったが、相撲関係者の語りから2004年から2005年の間に一度おこなわれたようである。その際にはトビリシ市内のレスリングの施設を借りておこなわれた。

現在国際大会に出場するレベルに達している選手は5名。その他ビギナーも含めると12名の現役選手が所属している。現在大相撲において相撲を取っている、黒海 (Levan Merab Tsaguria) の名は国内でも非常に認知度が高く、また彼が日本に行った2001年ごろは黒海の影響で非常にたくさんの方が相撲に集まったという。

○選手のリクルート

グルジアではレスリング (フリースタイル、グレコローマン) と柔道の人気非常に高く、オリンピックなどでも好成績を残してきている。上の写真は、グルジアのゴリ市にある柔道練習施設の一つ、“*Dzido kholi*”での練習風景である。この練習場は国の施設で、まだ完成して数年だが、生徒数は総勢約300人だという。一方で、先述したようにグルジア相撲協会においてはビギナーを含めて選手は12人程度しかいない。

グルジアにおいて柔道の人気があり、競技人口が多い要因の一つとして、グルジアの伝統的なレスリング“*Kartuli Chidaoba*”の存在が挙げられる。円の中で土の上で組み合うという点で、相撲と類似した点も見受けられるが、着衣の状態で相手を投げて倒すことで勝負が決まるこのレスリングは、柔道と技が酷似している。地方の子どもたち (特に東グルジア) の多くは小さい頃からこのレスリングに親しんでおり、このレスリングで好成績を残してきた選手は柔道においても有望な選手として位置付けられている。

グルジアでは日本の部活動のような学校教育と連関したスポーツ活動が存在しておらず、学校の授業内ではレスリングかサッカーがおこなわれている。したがって、若い世代の人々が、レスリングあるいはサッカー以外のスポーツをする場合、先に挙げたグルジアの伝統的なレスリングのような地域社会に根づいたスポーツを除けば、学外のクラブに所属しなければならない。先の写真にある、柔道の練習にきている少年達もそれに該当する。相撲に関しては柔道のような常設練習場を有しておらず、また小学生や中学生を対象とした練習も実施されていない。よってグルジアの相撲は、他のスポーツを引退した、あるいは他のスポーツからスカウトされてきた人々によって担われている。連盟関係者によると、主にスカウトに向く競技は、柔道、レスリング、ラグビーであるという。現連盟の会長自身もラグビーや柔道の関係者であったことから、若い選手をスカウトするコネクションは有しているものと考えられる。現在グルジア相撲連盟に所属する、国際大会に出場するレベルに達していると考えられている選手のうち、4人が柔道の選手で、1人がラグビーの選手であった。話を聞くことができた現役選手の1人は、13歳からラグビーをやっており、18歳



グルジアの伝統的なレスリングの様子⁴⁾

のときに相撲のコーチに誘われて相撲を始めたという。

○日本の相撲との関係

相撲連盟が設立された1999年および2000年に、日本相撲連盟の役員と大学生がグルジアに相撲の練習と指導のためにグルジアに来ている。99年にはグルジアから3人の選手が日本に招待され、2週間の研修を受けるなどの交流があった。現在も日本相撲連盟の役員と交流があるとのことであった。

2001年に Levan Merab Tsaguri 氏が大相撲へ初のヨーロッパからの力士、黒海として入門したことを契機に、グルジアからは計5人大相撲に入門している。現在は3人のグルジア出身力士が大相撲に参加している。グルジア相撲連盟には大相撲に行きたいと希望する選手が1人おり、目下、日本相撲協会と交渉中とのことであった。日本の大相撲に選手を送る際には、まずアマチュア相撲の日本相撲連盟の幹部に打診をして、彼を通じてプロ相撲の日本相撲協会に持ちかけられる。日本のアマチュア相撲の組織とは大会などを通じて交流があるが、プロ相撲組織、すなわち日本相撲協会とは選手を入門させる時だけの関係であるとのことであった。

日本ではないが、アメリカでおこなわれた相撲の世界大会で好成績を残した2人の選手に対して、アメリカでの永住権、グリーンカードが授与されたことがあった。それを機にその2人の力士はアメリカに移住した。黒海関が大相撲に入門した当時は、日本に行けるという魅力もあいまって、先述したように多くの人が相撲に詰めかけた。しかしながら現在、柔道やレスリングを人気、競技人口ともに凌駕するような地位を築くには至っていない。現在大相撲と交渉中であるという現役選手も、日本に行けるということに魅力は感じ

るが、経済的に成功する、あるいは家族に送金する、といった目的意識はあまり強くないと話していた。

小 括

本報告では、実施した調査のうちグルジア相撲協会の現状という点の報告のみおこなった。調査を実施する前の段階では、現在グルジアから日本の相撲に3人も力士が入門していること、そしてヨーロッパから初の力士を輩出した国であるということから、グルジアで日本の相撲が盛んに行われていると想定していた。そして日本とグルジアの経済的な格差から、大相撲を通じて日本で収入を得ることを強く希求する若い選手が多くいるとも考えていた。

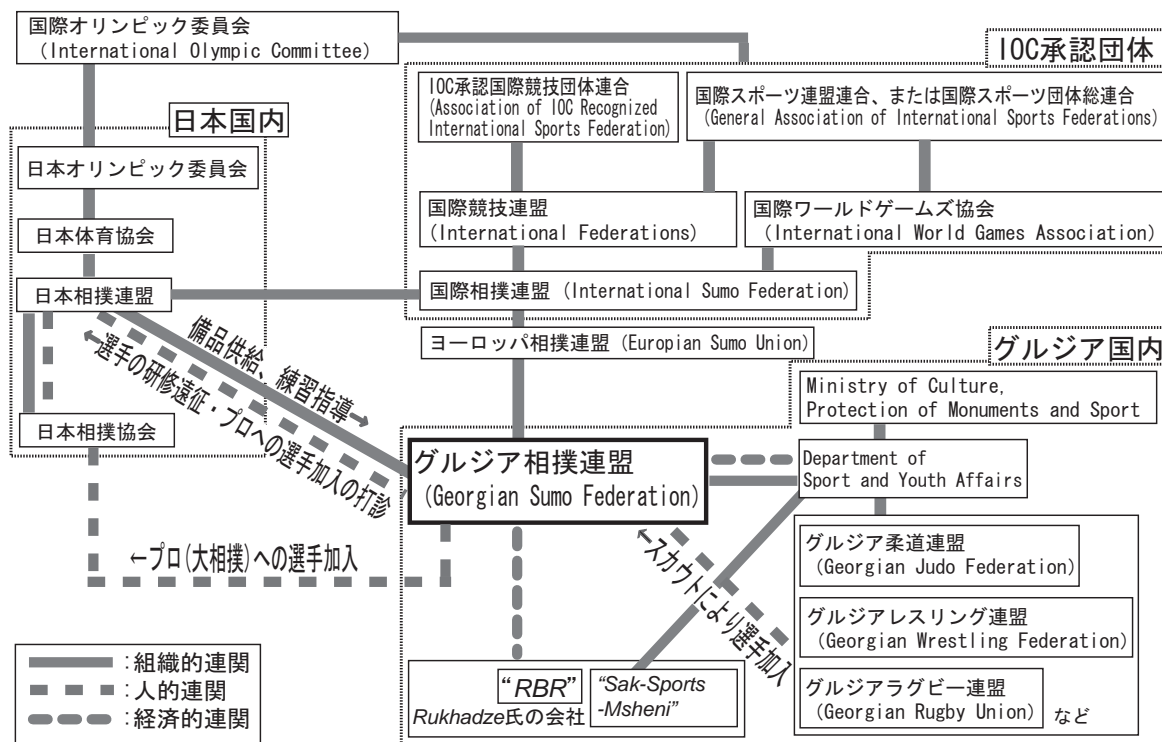
しかし現状は、相撲の競技人口が12人しかいないこと、グルジアではインフレが進み経済状況は決して良好とはいえないが、大相撲に入門を希望する選手が少なく、また、そういった選手であっても、必ずしも経済的に成功しようと希求しているわけではないことが明らかになった。

相撲は現在、IOC（国際オリンピック委員会）から暫定承認されている。また相撲の国際的な統括組織国際相撲連盟はGAISF（国際スポーツ連合）などのIOCが認める国際競技団体に加盟している。つまり、オリンピックの正式種目予備軍として位置付けられている（グルジア相撲連盟を取り巻く組織の連関図を資料として添付した）。相撲の世界大会も1992年から開催されて、2006年で第14回を数えている。

だがアマチュア相撲で実績のあるグルジアの現状を概観していくと、相撲の認知度は確かに高いが、競技人口や人々の関心の高さ、そして公的資金の額などからも、同じ日本の競技である柔道と比べるとグルジアにおいて相撲の普及・受容状況は進展していないといえる。

一方で先にオリンピックの正式種目となった柔道に関しては、競技人口、人気双方において相撲をはるかに上回っていた。柔道はすでに1960年代にモスクワで柔道を学んだグルジア人を通じてグルジアに伝わっており、確かに相撲より伝わった時期が早いという点でその人気の要因の1つに挙げられる。しかし、それ以上に受け手側の文化的要素、たとえばグルジアの伝統的なレスリングの技、および衣服などの形態が柔道と酷似していることなどが受容を促したのではないだろうか。つまり、日本の競技が受容される際には、その歴史的深度のみならず、受け手側の文化的な基盤と

グルジアにおける相撲組織の連関図



(IOCホームページ、聞き取りのデータを参照に発表者作成)

の接合が重要になってくると考えられる。

グルジアにおいて相撲の普及・受容が進展していない要因としては、組織の運営で見られたように、設立当初は日本相撲連盟から備品の支給等があったが、それ以降資金の援助等は一切グルジア相撲連盟に対してなされていないという点が問題の1つとして挙げられるだろう。

今回の調査ではグルジアの相撲組織の概観に終始することになり、本報告では、身体を通じた日本文化の翻訳と受容という研究目的に対して言及することはできなかった。今後、長期滞在による参与観察、聞き取り調査を実施することで、文化的側面、経済的側面、

さらには身体という側面から異文化接触、異文化変容の動態についての検討を試みたい。

注

- 1) <http://www.statistic.ge> (2007年3月8日取得), 『中央ユーラシアを知る事典』小松久男他編 平凡社 2005年発行, および『旅行人ノート シルクロード 改訂版 中央ユーラシアの国々』旅行人編集室 旅行人 2006年発行をもとに作成した。
- 2) グルジアの通貨はラリ (Lr) で, おおよそ 1Lr=1.7US\$ である。
- 3) ヨーロッパ相撲連盟のホームページ (<http://www.eurosumo.com/>) より。2007年3月8日取得。
- 4) 写真は <http://www.akhmeta.ge> より2007年3月5日取得した。